

一生ロックンロール宣言!



寝ても覚めても音楽LOVE……。

本企画では仕事やプライベートにおいて

“ロックな人生”を歩んでいる熱き人物を紹介する！

Text by Joe Yokomizo Photographs by Kazuhiko Tawara

Special thanks to Thunder Snake ATSUGI

File.007

三ツ井 忠

(富士フイルムホールディングス株式会社
経営企画部部長／Area59顧問)

TADDY MITSUI

Taddy Mitsui 1960年生まれ。関西学院中・高校と進み、マーケティングを専攻。ドイツ留学を経て、富士フイルムに入社。北米駐在後、デジタルカメラ・チェック・プロ用光機の商品企画を10年間にわたり担当する。現在は富士フイルムホールディングス経営企画部部長。ギターデザイン、ヴィンテージギター収集、Area59顧問、Zemaitis写真集「Stay with Z」著者。



インスタントカメラ「チェック」や「プロ用カメラGX645AF」。それだけではない。TUBEの角野秀行と春畑道哉、GLAYのHISASHI、そしてロン・ウッドなど名だたるロックスターのオートクチュール・ギターの企画・デザインもする。異端ビジネスマンが語る“視覚にこだわる”熱いロック論。

——チェックはヒットしましたね。

「はい、今でも良く売っています。あの時、企画チームが立てたコンセプトは<記録・記憶の道具にとどまらない、コミュニケーション・ツールとしてのインスタントカメラ>。つまりどこでも撮れて、撮った写真をその場でア・ゲ・ル、ということでした。持ち運び的にコンパクトなカメラとカードサイズのプリント。その結果、誕生したのがチェックなんですね。当時インスタントカメラの需要が多かったのが女子高生と業務用途……もちろん沢山リサーチしましたよ。商品企画会議でも『この商品の潜在需要は無数もあります』って、プレゼンして。携帯の写メとかありませんでしたから」

——結果は？

「商品自体には『こんなに小さいプリントは写真じゃない！』という見方もある。でも、一部の拒否反応を見て、これはイケると思った経営陣が凄

い。ある意味、寛大な会社です。僕らが作りたかったのは写真を超えるコミュニケーション・ツールだったのですから」

——ユニークなのは、その後も富士フイルムで役職を務めつつ、個人でGTZというユニットでギターを手掛けていること。ギターの魅力って？

「ギターのフォルムです。中学生の頃から、いつでもギターのデッサンを描いています。いくら良い音が出ても“セクス”を感じないギターはダメ。僕は結局、“視覚”なんです。例えばロン・ウッドが弾いているゼマイティスのメタルフロントのギター。ゼマイティスのことを知らなくても、ロックファンならロニーがあのギターを抱えただけで“Stay With Me”が聴こえてくるでしょう？」

——視覚で捉えるのは、新鮮かつ本質的ですね。

「生意気なことを言うようですが、僕は“ミュージシャン”の方にギターを作っているという感覚以上に“ロックスター”、つまり年間数十万人のオーディエンスの前でギターを弾く方々に、その人だけの一本を作ろうと心掛けています。“ロックスター”はロックをカッコ良く“魅せる”ことが仕事。彼らは音楽とビジュアルが一体となって唯一無二の表現となることを知っています。僕はその瞬間のためギターをデザインしているんです」



三ツ井氏がデザインしたGTZギターの数々。左からBroken Heart, Bones, New Hampshire(写真上)。

GTZは光の当たり方でその表情を変える。そのいい例が左のYellow Monkey, White Lady。右のGTZ初のブラウン基調モデルProblem(写真下)。

PRESENT!

三ツ井氏のご好意により、GTZ(松崎淳<Zodiac Works>、鷺田直樹<Guitar Traders>とのギター・プロジェクト)のメンバーも参加した著書「Stay with Z」を2冊プレゼントします。応募は公式サイトにアクセス！
www.rollingstonejapan.com